
百合小話

新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百合小話

【Nコード】

N5949X

【作者名】

新兎

【あらすじ】

百合のようなそでもないような一話完結の小話集です。ほぼ自サイトからのお引越し。

Prohibited fruits

林檎を向きながら美佐子は歌を歌っている。

寝起きの私はソファに座ってぼんやりとその横顔を眺めていた。

美佐子と一つ屋根の下で暮らしはじめてからもう1年が経つ。

この家は私の家であり兄の家であり、美佐子は兄のもので、言うなれば、彼女は私の義理の姉という立場になるのだけれど、私の方が三つ年上なので、お義姉さんと呼ぶのがなんかちょっと嫌で、私は彼女の事をずっと美佐子さんと呼んでいた。

その敬称が消えたのは半年前。

半年前になにがあったかっという、兄が海外出張で家をあけなければならなくなり、三人暮らしが二人暮らしになったわけで、なんとなく、気がついたら呼び捨てになっていたのだ。

兄が単身赴任してから少し経って、どうして兄についていかなかったのか、美佐子に訊いたことがあった。

すると、彼女は「ゆうちゃんが一人になるからついていてあげてって言われたの」と、微笑んだ。それを訊いた時、兄らしい言葉だなどと思った。

早くに両親をなくしてから、私たちはお互いに身を寄せ合って大きくなってきた。

私の傍にはいつも兄がいたし、兄の傍にいつも私はいた。それは兄が結婚をしてからも変わらなかった。

兄は私に家を出てほしいとは言わず、それどころか、新婚初日に「今日から一緒に暮らすんだから仲良くな」と私に美佐子を紹介する始末。

すぐに一人暮らしが出来るような貯金を持たなかった私にとって

それは喜ばしい話だったけれど、美佐子にとってはどうだったんだろう？

兄は鈍感だからそんなこと考えもしなかったはずだ。

新婚だっていうのに最初からお邪魔虫がいる状況なんて、私が美佐子の立場だったなら絶対文句言ってる。

でも、美佐子は私を一度も邪魔者扱いすることはなかった。

なにをするにも一緒だった私と兄の空間に一人増えたそんな感じ。もしかして、美佐子は兄と二人きりになりたいと思っていなかったのか、と私が少し心配になるくらい、彼女は三人で過ごす時間を大切にしているようだった。

そもそも満足に二人きりになれないうちから、いくら頼まれたからとはいえ離れ離れになることをあっさり承諾するなんておかしいと思う。

私だってもういい大人なわけだし、兄の頼みなんて聞かずついていっちゃってもよかったのに。別に彼女との二人暮しが嫌だってワケじゃないけど――ただ、なんていうか。

「ゆうちゃん、食べるでしょ？」

「あ、うん」

横顔を見ている間に林檎はいつのまにか切り分けられ綺麗にお皿の上に並べられていた。手を伸ばして林檎を一切れ取る。

「今、なに考えてたの？」

私の指先を見ながら美佐子が不意に言った。

「え？　なにってなにが？」

「私のことずっと見てたから、なんとなく気になって」

ドキッとした。暢気に鼻歌なんか歌ってたから、てっきり気づかれないだろうと、無遠慮に見ていただけに動揺する。

だけど「べ、別に見てないよ。自意識過剰なんじゃない」心にもない憎まれ口はもう慣れたものだ。

「ゆうちゃんは最近冷たいね」

美佐子が肩を竦める。

「気のせいでしょ」

「気のせいじゃないよ。前はもっと優しかったもん」

「なにカワイコぶってんの」

「ぶってないもん」

「もん」

「真似しないでよ」

「もん」

少し膨れた顔が可愛かったので調子に乗って真似を続けたら、すっかり機嫌を損ねて美佐子はぷいっと私から顔を背けた。

私はなんとかやり過ごしたことにホッとしつつ「林檎食べないの？」と声をかける。

「食べないなら全部食べちゃうよ」

もちろんそんな気はさらさらない。元々、林檎が好きなのは美佐子の方なのだ。

私の言葉に美佐子の体がピクッと反応する。

だけど、なかなか強情でこっちを振り返ろうとしない。それならば、と――

「じゃ、お皿ごと貰っちゃおっと」

言いながら、わざと音があがるようにお皿を自分の方へ引き寄せる。

「ダメ！」

堪らず、美佐子は私の方を向いて素早くお皿を掴んだ。

してやっつたりの表情で私は美佐子に笑いかける。逆にしてやられた方の彼女は先ほどよりもさらに頬を膨らませた。

「ゆうちゃんの意地悪。あんまり意地悪だと嫌いになっちゃうからね」

「美佐子に嫌われても痛くも痒くもありませーん」

両手をひらひらしておどけてみせる。美佐子は溜息をついてお皿から林檎を一切れとった。躊躇なく口に運ぶ。シャリッという音があがった。

蛇に唆されて禁断の果実を食べたイブは欲望を知る。創世記を思い出す。

「ゆうちゃん、食べないの？」

林檎を食べて機嫌がなくなった美佐子が私の手にある林檎に気づいて不思議そうに首を傾げる。

イブを唆した蛇は今の美佐子みたいに屈託なく声をかけてきたのだろうか？

私の手にはまだ口を付けていない禁断の果実がある。

サクリファイス

幼馴染の香苗が、突然「助けて」と家に飛び込んできたのは昨日の夜遅く。

なにから香苗を助ければいいのかも分からないまま、笙子は追ってくるものから彼女を守るために、一緒に逃げ始めた。

太陽が昇ってもなお、香苗の手を引きながら笙子は走っていた。

四角い空にはバラララと中継ヘリコプター。狭い路地にはピーポーとパトカー。大きな通りには、ゴゴゴゴと戦車。建物の中に入っただって、気が休まる暇はない。

外からパンパンと容赦なく笙子を狙うスナイパー。ザーザーと通信機片手に二人の位置をどこかに告げる密告者。

それら全てを振り切って、二人がたどり着いたのはゴミ集積所だった。

臭くて敵わないが、少しは時間が稼げるだろう。

笙子は香苗から手を離すと、粗大ゴミと化した冷蔵庫の上にへたり込んだ。香苗が静かに隣に座る。

「……で、これはなんの騒ぎなの？」

息を整えてから、笙子は最大級の疑問を口にした。

「なんなのって……笙ちゃん、ニュース見てないの？」

「あたしがニュースなんて見てると思う？ 長い付き合いなんだから、それくらい分かんないかなあ」

「……そうだったね」

ようやく香苗が強張った表情を緩めた。だが、その顔はすぐに暗いものになる。

「実はね」

そういつて、香苗が話し出したのは、到底すぐには信じられるレベルの話ではなかった。

しかし、実際に起きていることと照らし合わせると信じざるを得ない話でもあった。だから、笙子は訊ねた。

「……でも、なんであたしなの？」

香苗を守ってあげたいと思う人間なんて、それこそたくさんいるだろう。家族はもちろん、恋人だっていたはずだ。それら全てを無視して、ぶっちぎりで香苗が選んだのが自分。赤ん坊の頃からの付き合いとはいえ、いくらなんでもなー、と笙子と思う。

「他の人はね……ダメだったの」

悲しげな顔で香苗がそう洩らした。

ダメ——それがどういう意味なのか笙子は一瞬考えかけ、考えても無駄なことだと気づいた。その代わりにポケットからガムを取り出す。

「食べる？」

「え？ ……あ、ありがとう」

香苗はそう頷いてガムを受け取ったが、食べずにポケットにしまった。

笙子は包みを開けて、ガムを口に入れる。昨夜からなにも食べていなかった。

クチャクチャ。スー。パン。

風船ガムではないから、すぐに割れる。

口元にはりついたガムを手でまとめ、また口に入れては風船を作る。それを何度か繰り返し、ガムに味がなくなった頃、笙子は口を開いた。

「ねえ」

「……なに？」

「こうして香苗をつれて逃げてるのって、やっぱり犯罪になんのかな？」

「……どうだろ。わかんないけど」

「よくあるじゃん。映画とかで、国家なんとか罪とか言って」

「反逆罪？」

「そうそう、そういう感じの。ちよつとかっこいいね」

「……ゴメンね。こんなことに巻き込んで」

「別に暇だったし」

申し訳なさそうに謝る香苗に、笙子はぶっきらに返した。

「外国とか行ってみる？」

「え？」

「逃亡には欠かせないじゃん、高飛びって」

「でも……どこにも逃げ場なんて」

「そんなの、逃げてみないとわかんないじゃん」

消極的な香苗に笙子は声を荒げた。

無性に苛々していた。

世界にも香苗にも、香苗を迎えにきた奴らにもそれから、彼女を守れないと心のどこかで悟っていて、ここにいる自分自身にも——そのなにもかもに、笙子は苛立っていた。

立ち上がり、香苗の手を強く掴む。香苗が静電気でも浴びたように体をびくつかせた。

「笙ちゃん？」

「そろそ」

——そろそろ行こう。

そう笙子は口にするつもりだった。だが、言葉は最後までいえなかった。

銃声がして、背中に焼けるような熱が走った。

「笙ちゃん!!」

ウザイくらい甲高い声。

笙子は手を伸ばす。手は空を切り、香苗の姿は遠くなる。

ガシャガシャと世界が回る。ゴミが回る。

香苗が屈強な男たちに囲まれている。

笙子は動けない。ゴミが落ちてくる。

香苗が連れて行かれる。

笙子は動けない。ゴミが体の上にぶつかる。

香苗の姿が見えなくなる。

香苗だけが目的だった男たちは、笙子とその場に取り残して去っ

ていった。

太陽がやけに赤く、ゴミは臭かった。

笙子は呆然と転がったまま、空の色の移り変わりをただ眺めていた。

やがて夜がきて、星一つない空にキラリとなにかが光った。それが全ての終わりを笙子に告げていた。

笙子は、ゆっくりと体を起こす。

「……血、出てないし」

背中を摩って小さく呟くと、笙子は自分の体に視線を落とした。

ゴミ塗れでゴミ同然の自身の姿に、自然、掠れた笑いが喉の奥から零れ落ちた。

口の中にはゴムのようなガムがまだ残っていた。笙子はペツとそれを吐き出す。

香苗はあのガムをどこで食べるのだろうか？

笑い声はいつの間にか嗚咽に代わり、息が詰まって笙子はますます涙を流した。

無題

一緒に死んじゃおっか？

冗談めかしてヒロがいう。

私が冷たい表情で受け流すと、なんちゃってと付け加えて照れたように笑う。

私はなんとなくTVの電源オンにして。リモコンをソファに放る。ワイドショーは飽きもせず隣の国のスターに嵌るおばちゃんなんか映して。

ヒロの部屋はがらんとしていて居心地がいいような悪いような。なんだかんだで週の半分を過ごしているから、悪くはないんだろう。ヒロはキッチンで実家から送ってきたという、林檎の皮を剥いている。

私はパイプベッドに転がって、私とテレビとヒロの三点を結ぶと少し歪な三角形。

でもさあ、ヒロは続ける。

二人で死んでたらどういう風に報道されるのかな。お隣のおばちゃんとかが、ちょっと眉顰めて、そういえばよく一緒にいるところ見ましたね。仲良かったですよ、とか言っちゃって。で、友達の皆は、ヒロちゃんは明るくて優しくいい子だったのに、しくしくみたいな。死んじゃったら皆いい子になるから笑っちゃうよね。

私は声を出さないで笑う。

ヒロはくすくすと笑っている。果物ナイフが光を反射して顔はよく見えない。

TVの電源をオフにする。

黒くなった長方形の画面にヒロの横顔が微かに映った。

蟻

ふと気がつくとユキがしゃがんで何かを見ていた。

「ユキ、なんしようと」

たか子が不審に思ってそう問うと、ユキはさも当たり前のようにこう答えた。

「蟻を観察してるの」

一瞬、視線を上げてそう答えたあと、ユキはまた視線を下にやり蟻に見入る。

蟻なんて観察してなにが楽しいのかとたか子は首を傾げるが、ユキはただじっと蟻を見続けている。耐えかねて、たか子はユキに聞いた。

「……楽しいと？」

「楽しいわけではないじゃん」

下を向いたままユキが答えた。

なら、なんで？ また問い掛けたかったがユキの真剣な横顔を見たら質問をし辛い。

仕方なくたか子もしゃがんで蟻を見てみた。

行列から離れてしまったかのような黒くて小さな蟻がうろうろと動いている。動く。宛もなくただ。もしかしたら、なにか宛があるのかもしれないがたか子にはそれを悟ることは難しい。

「蟻って食べると結構甘いんだよ」

唐突にユキがとんでもないことを言っただけだ。
咄然。たか子は、ユキを凝視した。

「知ってた？」

ユキが子供のような人懐っこい笑みを浮かべる。

「……食べたことあると？」

「一回だけね」

ユキは何かを摘んで口に入れる仕草をしながらあっさりと言った。

あからさまにたか子の顔は歪む。その顔を見て「言わなきゃよかった」とユキは後悔したように小さく首を振り、再び視線を蟻の方に戻した。

まさか食べようと思って見てたわけじゃないだろうな？ たか子は、蟻ではなくちらちらとユキを見ながら思う。

「蟻って一匹だけだとあんまり意味ない生き物なのかな」

「なんで？」

「だって、働いてなさそうじゃない」

いまだうろうろと当所なく動く蟻を人差し指で指しながらユキが言った。

「働いてなさそうで働いとるんやろ」

「ホントに？」

ユキはいつの間にか顔を上げていた。真っ直ぐにたか子を見据えている。

「そんなんうちに聞かんで、その蟻に聞いて」

「どうやって？」

ユキは怪訝そうに首を傾げた。

「ちょ、直接聞いたらいいんじゃないと？」

語尾がなぜ疑問系になってしまった。

「ふうん」と腑に落ちない顔をしたまま、ユキがまた蟻を見る。顔は真剣そのものだ。

まさか本当に聞くんじゃないだろうなと見ていると

「あなた、働いてるの？」

彼女は本当に聞いた。勿論、返事なんて返ってこない。

「おーい、蟻さん」

ユキはまだ蟻に声をかけている。たか子は惑う。

ここは言いだしっぺの自分が蟻の代わりに返事を返したほうがいいのだろうか？ しかし、そんな恥ずかしいことは出来なかった。

結局、たか子はなにもせず、蟻に話しかけるユキの横顔を見ていた。

数分後。不意にユキが蟻から目を上げた。ぱっちり目と目が合う。気がつかないうちにずっと見てしまったらしい。

「こんなところでなにしてるの、たか子？」

ユキがキョトンとした顔で聞いてくる。

驚くべきことに、ユキは今まで傍にいたのが誰かということに全く頓着していなかったようだ。

それほどまで蟻に没頭していたのだろうか？ たか子は心底呆れながらも答える。

「に、人間観察とか？」

「暗いね、たか子って」

「っ……」

鼻で笑われて、たか子は低く唸った。

蟻の観察とか蟻への呼びかけなんかよりは遥かにマシだ。心の中で悪態を吐く。

空は高く、青い。秋の陽だまりが心地よかった。

テレフォン

コンビニのレジで財布を取り出すためにバッグを開けたところで、携帯の外側ディスプレイがピカピカと光っていることに仁美は気づいた。

急いで会計を済ませ、誰からの電話かよく確かめもせずに通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「あ、ひとみー？ 久しぶり」

間延びした名前の呼ばれ方。もうずっと聞いていないが、忘れるはずのない声。

仁美は驚きのあまり携帯を取り落としそうになった。

なぜなら、彼女から電話がかかってくるなんて、もうありえないことだと思っていたからだ。

鼓動が一気に跳ね上がる。携帯を握る手に汗をかいていた。

確かめるように恐る恐る彼女の名前を呼ぶと「うん、そうだよー」と、嬉しそうな返事が返ってきた。そのゆったりとした口調に、若干の安堵を覚える。

「なんとなーく、仁美の声が聞きたくなって……でも、なんだか、いつも私から電話かけてるよねえ」

「……う、ゴメン」

少し怒った風な声に、つい謝ると、ふんわりとした笑い声が聞こえた。

「冗談だよー」

笑いながら彼女は言い、それから仁美に近況を聞いてきた。

だが、仁美は、上手な近況報告は出来なかった。なにを報告すればいいのかわからなかったのだ。

その戸惑いが伝わったのか、彼女は質問を変えてきた。

学校の様子や、休日の過ごし方について――色々と細かく、なるべく仁美が答えやすいようにしてくれているのが分かった。

対して、仁美は完全に受け手にまわっていた。

何度も願っていたのに。彼女に聞きたいことがたくさんあったというのに。

今、彼女と電話をしている、という事実をいまだ受け入れられな
いまま、仁美はただ彼女の声を聞き、返事を返すしか出来なかった。

それはあまりにも彼女が屈託なく、まるで昨日も会っていたかのような調子で話をするせいなのかもしれない。

「仁美？　どうかした？　なんだか元気ないね」

仁美の様子に気づいたのか、ふと彼女が心配そうに聞いてきた。

仁美は唇を噛み締める。

「……アヤちゃんは、元気なの？」

震える声になってしまうのは、どうしようもなかった。

仁美の問いかけに、彼女は微かに息を飲み、少し経って「どうしてそんなこと聞くの？」と同じように震えた声で返してきた。

仁美は込上げてくるものを飲み込みながら、また聞いた。

「そっちの生活はどうかになって思っ

「うーん」

「……楽しい？」

「……どうだろ」

返ってくるのは曖昧な返事だけで、仁美はもう我慢できなくなっ
た。

言っではいけないことだというのは分かっていたが、仁美は出て
くる言葉を止められなかった。

「私は、もっとアヤちゃんと一緒に居たかった」

一瞬の静寂。

彼女が向こうで鼻をすすった。

「……うん、そうだね。私もできたらそうしたかった……でも、こ
ればかりは、仕方ないからね」

喉の奥からどうにか搾り出したかのような苦しげな声だった。

彼女の辛さがダイレクトに伝わって、仁美の目からはぼろぼろと
涙が零れていた。それを悟られないように仁美は必死で嗚咽を堪え
る。

だが、彼女はそんなこととお見通しのようだった。

「ねー泣かないでよ」

「……泣いてなんか、ない」

「そっか……」

「……そうだよ」

左手でごしごしと目を擦り、そう強がってみせると、彼女は安堵の息をついたようだった。それから、いつものゆったりとした調子で彼女は言った。

「それじゃあ……そろそろ切らなきゃ」

「電話番号、教えて。今度は、私からかけるから」

仁美は咄嗟にそう口にしていた。彼女からの電話をこのまま切つてはいけないと思った。
くすり、と彼女が笑う。

「電話番号、ないから」

「……そっか」

仁美は彼女の言葉をそのまま受け止めて頷く。
もう別れを言わなければいけないのだろう。あの日、言えなかった別れの言葉を――

「またね、アヤちゃん」

「……うん。またね、仁美」

少し躊躇して彼女は言った。

電話が切られる。

仁美は、しばらく携帯を耳に当て、ツ、ツ、という音を聞いていた。

やがて空から振り出した雨に我に返った仁美は携帯を耳から離す。

着信履歴には、何も残っていなかった。それが『またね』なんて無いことを仁美に無情に教えていた。

携帯をしまい、仁美は空を見上げる。

空はあの日と同じ、8月の曇り空。

曇天の空を覆う雲と同じ色をした煙。それを見送った制服姿の自分。

ひととおり思い出し、仁美は歩き出した。

柔らかい雨は傘を持たない仁美の体を徐々に侵食し、仁美はただ雨に濡れながら歩き続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5949x/>

百合小話

2011年11月17日18時31分発行